

現地を訪問して想うこと

五味 敬明（1967・理工）

最近の新聞・テレビでは震災地の報道がめっきり少なくなり、現地の状況が判然としない。そこで「自分の目で現地を見るしかない」と考え、今回初めてツアーに参加した。

この参加では、以下のことを現地で確認しようと考え状況把握に傾注した。

- ① 震災で壊滅的な現地の状況を伝えていた報道がいつしか消え、人々の関心も風化しつつある。最近の報道では、震災復興進度を的確には把握できない。「実態はどうなのか」を見て見たい。
- ② 東北3県は特に大きな被害を受けた上、福島第一原発事故が影を落としている。日本列島の中・西部の住人は概して3県全域が同様の被害に遭ったように思っていて、「東北の農水産物は放射線汚染しているから買わない」という人もいる。この考え方は、はたして正しいのかどうかを知りたい。
- ③ 震災から3年半経過した現在、「我々は何の応援ができるか」「現地ではどのような支援を期待しているか」など探りたい。

宮城県コースのツアーでは、「石巻・女川地区」「松島地区」「閑上地区」などを中心に案内された。又、勉強会では被災された校友（佐々木さんご夫妻）の体験談を聞いたり、その後の交流会で色々な情報を得ることが出来た。以下には、これらの視察・ディスカッション等で知り得たことを踏まえ、前記の“現地確認予定事項3点”に対する成果を記述する。

・実感では、復興の程度は地域によって大きな差があると思った。女川地区は“20mの津波が川を遡上し、海から遠い集落まで大きな爪痕が残った”そうである。そのため防波堤の復旧や切土・盛土の工事は着々と進められていた。一方、閑上地区は“地震による地盤沈下”の盛土が急務となっている。だが津波で流された家は流失や瓦礫と化し、やっと瓦礫が除去されても背高泡

立草の密生地になっていた。“復興は手付かず”といった状態である。これには「行方不明者が未だこの下に眠っている可能性があることから、関係者の同意を得ずしてこの上に盛土ができない」理由があるとのこと。

- ・放射線汚染の農水産物への影響は“限定的”であった。津波で塩害を受けた農地も70%程度まで復旧。それを示すように、あちこちの田んぼは黄色く稲が実っていた。又、漁業・水産加工業の復興も顕著である。震災で「港湾設備や冷凍冷蔵設備が壊滅状態」と聞いていたが、今では「能力的に70~80%復興できている」そうである。宮城県の場合、農水産物への放射線汚染影響は極めて小さかった由。でも「放射線汚染が基準値以下であるにも拘わらず、風評被害や誤解が多くて困っている」と嘆いておられた。
- ・震災復興では“住まいの問題”“被災者の心身ケア”“復興の町づくり”“雇用確保・地域産業の再生”“原発事故対応”“防災対策の強化”など、未だ未だやらねばならないことが山積している。では、我々が支援するには何をしたら良いのか、何ができるのか。残念ながら個人レベルでは直接の支援は難しい。まずは、次のようなできることから皆でコツコツと実行して行くしかない。
 1. 東北被災地の産物を積極的に購入し、現地の産業活性化に寄与する。
 2. この震災の復興を見守りつつ、未曾有の災害を忘却させない。

以上がツアーの視察結果である。結論的としては「一概に復興が遅れているとは言えない」「放射線汚染地域は限定的である」「校友支援は被災地の産物を購入することと、3.11災害を風化させないこと」となる。